衣のNGO
ふるぎのゆくえをおいかけて
JFSA
わたしたちのくらしをささえる
せかいのまずしさをかんがえる

NPO法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会
〒260-0001　千葉市中央区都町 3-14-10
Tel・Fax：043-234-1206
E-mail：jfsa@f3.dion.ne.jp
ホームページ：http://www.jfsa.jpn.org/

会報 50 号　2019 年 9 月

パキスタン派遣報告

第5分校の開校に向けて、100家族以上に話をして回り、2015年9月1日の開校の時は、35人の生徒が集まりました。現在は、幼稚園クラスから7年生まで、452人の子どもたちが通っています。

学校の建物は大きいので、将来的には倍くらい数の子どもたちを受け入れて、10年生まで勉強できる環境を作りたいと、のアッバースさんは言います。

派遣報告「第5分校長アッバースさん」(2~3p)より抜粋

アル・カイールアカデミー第５分校　授業が終わり下校する子どもたち

目次

パキスタン派遣報告
　第５分校長アッバースさん　2～3p
　「安心」して働く　4～5p
　カラムさんとアセフさん　6～7p
　連帯事業を拡大するための回収品目調査、第一弾!!　8～9p
招日報告「交流会」　10p
千葉センター便り「毎月恒例『軒先市』」　11p
東葛センター便り「一人前」　12p
心根（こころね）フリマ通信
　「つながりひろがれ ぽっぽの市」の広がり　13p
フォトギャラリー ～運ぶ～　14～15p
チャエ・ケ・サート「バクリー（牝山羊）」　16p

派遣報告

授業中の第５分校

第５分校長アッバースさん

kapre 千葉店担当事務局　大橋　紀子

今回のパキスタン派遣の目的は、二つありました。一つは、ＪＦＳＡと同じように古着を回収し、アル・カイールアカデミーの支援を行なっている、韓国のハンサリム生協のメンバー７名（会長、単協理事長４名、職員２名）のパキスタン派遣に同行し、アル・カイールアカデミーの見学、古着販売事業について伝えること。もう一つは、２００５年のパキスタン北部地震の際に、ＡＫＢＧ事務局のカユーム氏の故郷の村に開校した青空学校の今後について考えるために、現状の確認をすることでした。

その中で、第５分校長アッバースさんにインタビューしたことについて取り上げたいと思います。

アッバース・アリさん
～学校との出会いから第２分校長になるまで～

アッバースさん（おそらく40歳位、出生届がないため本人も分からない）は、８人兄弟姉妹の長男で、本校のすぐ近くのスラム地域に住んでいます。１９８７年に本校がオープンした時からアル・カイールアカデミーのことを知っていました。その頃彼は、８～９歳で公立学校に通っていましたが、ムザヒルさんが学校を始める様子や、子どもたちの様子を見て衝撃を受けたそうです。その後勉強を続け、マトリック（大学入学の資格が得られる全国的な試験）に合格した１９９４年、午前中カレッジ（専門学校）に行きながら、本校の午後のクラスを受け持ち教えるようになりました。

その後、第２分校（ごみ捨て場内の学校、２００２年に開校）を立ち上げることが決まった時、分校長をムザヒル校長から任命されました。開校に向けては、ゴミ捨て場で暮らす家族に話をして回る活動を行ないました。人々の中には、学校とは何かわからない人もたくさんいたそうです。家族皆でゴミ拾いの仕事をしているので、子どもがどこかに連れて行かれてしまうのではないかという不安があり、学校に行きたがらない家族が多く、家族を説得して回ることがとても大変だったと言います。

開校の時、生徒は４人でした。勉強を教えるというより、一緒におやつを食べたり、身体をきれいにしてあげることから始め、一ヶ月後には35人、一年後には１００人以上の生徒が通うようになりました。初めの頃は建物もなく、モスクの壁を黒板代わりにしていました。

「今、第２分校の環境はだいぶ良くなってきています。４～５年前から、住んでいる人々にも知られてきて、だんだんと理解が得られてきています。」と、２０１５年にアッバースさんから分校長を引き継いだカシフさんは言っていました。

第５分校の始まり

アッバースさんが第２分校長をしている時、第５分校がある地域から第２分校まで通って来ている子どもがいました。そこには廃校になっている学校があると聞き、ムザヒル校長と一緒に見に行ったことが、始めのきっかけでした。

その後、10日間周辺地域をまわって調査をしました。この地域はバロチスタン州との州境まで５キロほどで、バロチスタン州からカラチに仕事を求めに来た人たちも多く暮らしています。

今の第５分校がある場所は、もともと公立学校でしたが、廃校になり20年近く使われていませんでした。「公立学校は、政府による管理がなされていないため、先生は給料をもらいながら他の仕事をして学校に来ないのです。」とムザヒル校長は度々言います。アル・カイールアカデミーがあるシンド州は特にひどい状況で、州内だけで８千校も廃校になっているそうです。一方で、高い授業料が必要な私立学校には良い先生が集まり、質の良い教育が行なわれているという、とてもよくない状況があると、アッバースさんは怒っていました。

そのような状況があり、アル・カイールアカデミーはシンド州政府から廃校になった学校の建物を借りて、第５分校を始めることを決めました。しかし、周辺に暮らす人々には、また公立学校が来るのかと思われ、なかなか生徒が集まりませんでした。開校に向けて、１００家族以上に話をして回り、２０１５年９月１日の開校の時は、35人の生徒が集まりました。現在は、近くに住む子は大体の子が来ており、幼稚園クラスから７年生まで、４５２人の子どもたちが通っています。

学校の建物は大きいので、将来的には倍くらいの数の子どもたちを受け入れて、10年生のマトリックまで勉強できる環境を作りたいと、アッバースさんは言います。

子どもたちへ

分校長として、子どもたちに伝えたいメッセージはあるかと尋ねました。

「自分自身もスラム出身ですが、学校に通うことができ、良いこと、悪いことを教わり、自分で考える力を身につけることができました。生きていくためには勉強することが一番大切だと思う。」と答えてくれました。

アッバースさん（左）と第５分校で学ぶ男の子

アル・カイールアカデミー本校で行なった交流会
各分校長や、先生たち、学校のスタッフが集まった

ハンサリム生協のメンバーが滞在中は、本校をはじめ、分校（2、3、5、6、8）、カレッジ、縫製工房、古着業者ニアーズ氏とワリー氏の倉庫の見学、本校で生徒へのインタビュー、学校の給食室で働く女性のお宅訪問　と、盛りだくさんな内容で活動の様子を伝えました。

特に、第２分校ではハエがものすごく多い中、勉強している子どもたちや、教えている先生の姿に感銘を受けている様子でした。

ハンサリム生協としては今後、一方的ではなくアル・カイールアカデミーにとって必要で、継続性のある支援をしていきたい、という言葉を滞在の最後に聞くことができました。

中心にいるのは、熱心に勉強している、勉強したいという子どもたちの気持ちです。その気持ちを形にできるように、様々な形で様々な人々が学校を支え続けていけると良いなと思います。今後も、アル・カイールアカデミーと一緒に、JFSA も考えていきます。

派遣報告

「安心」して働く

女性が「安心」して働くための縫製工房で働く２人の男性
左がアーディルさん　右がナシームさん

東葛センター担当事務局　小島　慧

縫製工房での仕事

縫製工房では現在、女性４人、男性２人が働いています。

縫製工房は、２０１２年４月に開きました。アル・カイールアカデミーを卒業した女性たちや、本校に子どもたちを通わせている母親たちが「安心」して働ける場所を作ることが目的です。ときには近隣からミシンを扱うことの出来る女性たちを助っ人として呼び、仕事を日本から請け負ってきました。日本からの依頼が無い時にはローカルカームと呼ばれるボタンや服の袖を縫った個数の分だけ賃金が支払われる仕事を行なってきました。しかし、ローカルカームで得られる収入はとても少なく、決められた箇所を１着分やったとしても１ルピー（7円ほど）に満たない事が当たり前となっています。パキスタンの日用品の物価は日本よりも安い場合が多いですが、残念ながらローカルカームのみで家族を養っていくことは難しいです。現在は日本からの仕事の依頼を定期的に受注しているため、ローカルカームをすることは少なくなっています。

こういった「女性」のための縫製工房の中で男性が２人働いています。１人目のナシームさんは、私の派遣中だった２０１９年８月から縫製の職人として働き始めました。年齢は50歳ぐらいだそうです。年齢が定かでないのにはイスラム教のなかでは１年の日数が世界の多くで使われている３６５日で１年という周期では無い事や、出生届けの義務がパキスタンにはないことなどから大体の年齢でこれぐらい、というケースがあります。縫製の職人としては実に30年近くの経験があるそうです。まだ縫製工房で働き始めて日が浅いので、ナシームさんに焦点を当てた記事は別の機会で設けられたらと思います。

アーディルさん

今回の記事ではもう１人の男性スタッフであるアーディルさんに焦点を当てながら私の派遣中の様子も報告していきます。彼は私と同世代です。パキスタンの単科大学も卒業しており、結婚しています。今年１人目の子どもが生まれ、父親でもあります。家は本校から数十メートルのところにあり、３世帯家族で住んでいます。

縫製工房を準備する段階の２０１２年２月から働いており、前述したローカルカームを学校の外に出て請け負ってくることや、日本からの依頼に必要な生地やボタンなどの素材の調達などを行なっています。依頼に関するやり取りは主にフェイスブックのメッセージ機能を使っています。ときにはビデオ通話も用いて、急ぎであっても直接進捗を確認できます。パキスタンではＪＦＳＡのスタッフも含めて、女性が１人で外に買い物や用事を済ませに行くことはほとんどありません。男性と一緒である場合や複数の女性同士で行動をします。そういった文化の中で縫製工房が女性たちだけで運用されるのは難しく、「安心」した職場環境を作り上げていくには彼の様なスタッフも必要となります。元々、アーディルさんはミシンができるわけではありませんが、今年に入ってからは少しずつミシンを始めて製作にも携わっています。余談になりますが、私自身も服を作ることとはどんなことなのかを知るために４月から東葛センターでミシンの練習を始めました。

１メートルか１キロか

今回の２０１９年７月22日～29日までの派遣期間中はアーディルさんの案内の下、パキスタンのカラチ市内のマーケットで、縫製工房への新たな仕事の依頼に必要な素材の調達や価格調査、本校近辺のローカルカームを受注している縫製業の視察を行ないました。

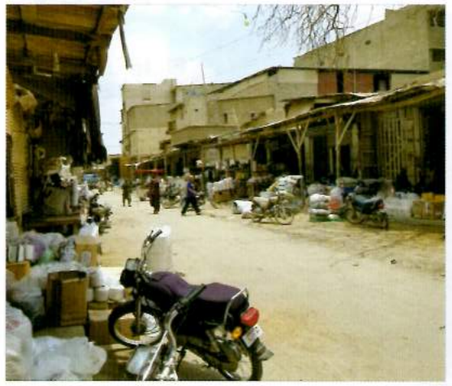
マーケットは、素材ごとに売られている場所がまとまっており、様々な色や柄の生地やボタンやファスナーが売られている通りがそれぞれの場所で軒を連ねています。店の人たちに探している物を尋ねると、自分の店に売っていない場合は、心当たりのある近くの知り合いの店を紹介してくれたりもします。そういった紹介をしてもらいながら必要な素材を一つずつ調達していきます。店によって価格の設定も全く異なります。例えばデニムの生地を見に行くと１メートル当たりの金額を提示するところもあれば、１キロ当たりの金額を提示するところもあります。そのため予算の中で必要な分量をそろえていくのには、今までに何度もマーケットに足を運んで相場を見てきたアーディルさんの様なスタッフが欠かせません。

ローカルカーム

ローカルカームの視察では本校から50メートルほどのところにある４階建ての事務所兼工房を視察しました。主に子ども服の縫製と飾りの取り付けを行なっていました。訪問時は男性７人、女性２人が働いていました。子どもたちが働いている様子はありませんでした。１着の子ども服を縫っていくなかでも部位によって金額が異なり、Ｔシャツの片方の脇を縫い合わせると0.25ルピー、前後の裾の始末は0.5ルピー、刺繍を施した飾りをＴシャツの真ん中にグルーガンを使いボンドで留めるのは3ルピーなどといったように細かく分かれています。日によって全く作る数は異なるという事でしたが、少なくともそれぞれの部位を分担して一日あたり数百着の子ども服を完成させるということでした。これは一日中同じ部位を縫い続けても１千ルピー（約７００円）もらえればとても多いことになります。今回の視察を行なえた場所は残念ながらこの１ヶ所のみでしたが、ローカルカームの実態が少し見えてきます。

女性たちが「安心」して働く

縫製工房は女性たちが「安心」して働けることを目指しています。背景にはパキスタンという国の事情が大きく存在しており、男性の力も必要です。彼女たちが様々な意味での「安心」を得ながら生活するためにも継続的な仕事作りが欠かせません。そのためにＪＦＳＡでは縫製工房を軸とした「kar-khana（カルハナ）事業」という新しい試みを今年度から始めています。日本でデザインを考えた商品案を縫製工房や街の仕立て屋に製作してもらい、日本で販売します。こちらに関しては次回の会報で皆さんに詳しくお伝えできればと思います。



ボタンや生地、ファスナーなどの縫製に欠かせない素材屋が続く通り

派遣報告

カラムさんとアセフさん

アル・カイールアカデミー本校で車の修理をするカラムさん（奥）

東葛センター担当事務局　田辺　航太郎

今回の主な派遣目的は、学校訪問、古着市場調査、縫製工房での仕事、海外古着買付でした。派遣報告では、移動中だったり、仕事の合間であったり、ちょっとしたときに聞いたお話を書きたいと思います。

メカニックのカラムさん

「見せたいものがある。車を作ったんだ。今はアサドが乗っている」

車で移動中、運転しながら助手席の自分に向けて彼は言いました。「はぁ!!」と驚く自分に彼はにこにこしています。カラムさんはアル・カイールアカデミーで車の運転手兼メカニックと分校のソーラーシステムのメンテナンスをしています。アサドさんはアル・カイールアカデミーで庶務の仕事をしていて、2人とも若く、私たちのコンテナが届くと一緒に荷下ろしもします。カラムさんはメカニックの技術があるので、少しずつ車の部品を買ってきてそれを組み立て、完成した物をアサドさんが買ったそうです。もちろん修理も請け負います。今もまた別の車を作っているそうです。

彼は幼いころに父親を亡くし、6歳の時からメカニックの仕事を始めました。母親が工房の親方に頼んでその仕事を得たそうです。頼む母親と、引き受ける親方の気持ちはどうだったのだろうと想像します。

そのカラムさんのお母さんはムザヒル校長の家で家政婦の仕事をしていたので、自分や長いスタッフはカラムさんが幼いころから知っています。そのメカニックの工房にもたびたび立ち寄っていました。今は結婚もして、娘さんもいます。普段は自分の前ではおとなしい感じですが、先ほどのようにたまに驚かせてくれます。

「この間すごい古い車が修理に来たから直して、走り出したから良かったと思って止まったら、その勢いでボンネットからエンジンが外に飛び出したんだよ!」

その場のみんなが笑っています。アサドさんも豪快に笑っています。今度会った時の笑い話の主人公が彼ではないようにと思いました。

仕立て屋のアセフさん

アセフさんは、仕立屋を営んでいます。パキスタンでは、男性の場合は洋服を着ている人も少しいますが、それ以外の男性とほとんどの女性は民族衣装であるカミーズ・シャルワールを着ています。その服を買う時、既製品もありますが多くの場合はまず生地屋で生地を買い、その後に仕立屋で採寸して作ってもらいます。彼は学校のあるノースカラチ地区で評判の仕立屋でした。商店街の一角に店舗を構えてそこで注文を取り、そこから車で5分ほどのビルの中に工房を持ち、数人の職人を雇って仕事をしています。

「kar-khana（カルハナ）事業」（4～5p参照）をするにあたり、例えばサンプルを作ったり、型紙におこしたりするのには専門家であり腕の良い職人の助けが必要なので、評判を聞いて頼んでみたところ、人柄も含めて付き合っていきたいと思わせる仕事ぶりでした。逆に言えば、「カルハナ事業」は彼との出会いが無ければ進んでいなかったと思います。そんな彼に、注文の合間、チャイを飲みながら話を聞きました。

「私は8歳のころからこの仕事をしています。この仕事では、一人で1着を縫えるようになるまでは大体4～5年かかります」

8歳のころからというところを強調して、とても誇らしげに言っていたので、自分から始めたのかと聞くと、「母親に連れていかれました」と笑って答えました。「親方がとても良い人で仕事をしっかり教えてくれて、難しかったけれど好きだったので熱心にやっていました。親方のことはとても尊敬しています」

小さなころからで大変だったのではないかと聞くと、彼は懐かしむようにそう答えました。その親方とは今でも付き合いがあるそうです。

カミーズ・シャルワールの仕立てをしているアセフさん（左）

「14～5年そこで働いて、今の店の並びの小さな店を借りて独立しました。そこで4～5年やった後、今の店を買いました。仕事は順調ですが、職人を確保するのに苦労しています」

彼のお店を訪れると、ひっきりなしにお客さんが来るので繁盛していることがわかります。職人の仕事は歩合制で、1着作るといくらと決めて払っているそうです。彼らはそれとは別に個人で仕事を請け負っていたりもするので、そっちが忙しくなれば店に来なくなることもあるそうです。他所に移ることもあるでしょう。工房の業務時間は9時から17時までです。彼は早ければ朝から、普段は昼頃からそこで作業をして、18時から店を開けて24時から1時ごろに店を閉めます。大都会カラチでは夜中まで人が動いています。

「休みはあまり無いですが、お客さんがたくさんいるので」休めているのかを聞くと、あきらめというよりは、やっているうちにこうなって、今はこういう状況だというのを普通に話してくれた感じでした。そんな彼に仕事を頼むのは少し気が引けるところもありますが、今後も付き合っていきたいという思いと一緒に頼んでいきたいと思っています。

カラチ市内　多くの車やバイクが行き来し、警察官が交通整理をしている

派遣報告

連帯事業を拡大するための回収品目調査、第一弾！！

カラチ市内の特別加工区内（KEPZ，通称ゾーン）
古着の卸売業者の倉庫。この倉庫には毎日大量の古着が輸入されている。
アフリカなどの諸外国に再輸出するため、選別などを行なう人が多く働いている。

千葉センター担当事務局　入江　賢治

今回の派遣では、ＪＦＳＡで受付をしている「回収品目」について、見直す点がないか現地調査を行ないました。

回収量と事業収益の増加

ＪＦＳＡの回収量は今年度計画に届かず、年４回のコンテナ輸出量の確保が難しい状況です。ＡＫＢＧの古着販売事業もマーケットが低迷し、利益が減少しています。この状況に対して、回収品目を見直してみることが解決策にならないだろうかと考えました。その理由は前年度より行なったパキスタンの古着マーケットについて知るための調査の経験がありました。小売・卸売業者を訪問し、そこでは様々な商材が流通し、利益を生むための仕組みや販路がありました。ＪＦＳＡ・ＡＫＢＧの連帯事業でも、現在の「回収品目」を見直し、販売する事業素材を増やすことができれば、回収量と収益の増加につなげられる可能性があると感じました。

現地調査の内容は主に①新たに回収品目に加えられる品目の調査②現在の回収品目で制限がある品目についての需要の再調査、としました。この会報では①についてご報告します。

布団はどうだろう？

新しい品目の調査として、今回、必ず確認したかったのが布団です。理由は布団は受け付けていませんか？というお問い合わせをいただくからです。ＪＦＳＡでは毛布、タオルケット、シーツは回収していますが、布団は回収していません。パキスタンでの需要・価格が不明だったこと、国内ではかさばるため保管スペースが必要になること、一部は国内での販売が可能か等、懸念される点があり難しいと考えてきたためです。布団が日本からパキスタンに輸出されていることは知っていましたが、現地で実際に実物を見たことはありませんでした。

ＡＫＢＧカユーム氏と、布団を扱う４人の古着卸売業者を訪問しました。そこには日本から輸入した布団が山のようにありました。それは、１個２００ＫＧ近い巨大なベール（圧縮した塊）でした。

ひとりの業者は「ＯＳＡＫＡ」から来た「ＦＵＴＯＮ」と日本語で言っていました。一般的には「コンフォート」と呼ばれるそうです。日本の他にも、イングランドやドイツ、イタリアなどヨーロッパからも寝具を輸入しているそうです。今回、知りたかったのは需要のある布団の種類と価格でした。種類は敷・掛け、マットレス、ベッドパットから羽毛まで一通りの種類の需要があり、羽毛は特に高価だと言っていました。価格は１ＫＧあたり１００ルピー以上で買うと言う業者もいました。１００ルピーは現在の輸出品目リストの中では高い品物の部類に入ります。日本の品物については「クオリティは良いが、柄が地味」と言っていました。現地では派手な華やかな柄の方が好まれるようです。布団はカラチでも使われますが、パキスタン国内でも気温が下がるエリアやアフガニスタンに送られ販売されていくそうです。

事業拡大に向けて

今回は調査第一弾として、日本の布団類の需要があることが確認できました。直ぐに布団の回収を始めることはできません。今後、より具体的な情報が手に入れられるように、サンプルの布団をＡＫＢＧに輸出したり、ＪＦＳＡとして布団を受け付ける体制を作れるのか、検討を重ねていきます。

現在、ＡＫＢＧはニアーズ氏という卸業者にコンテナをそのまま卸売りしているので、その他の業者と品物を売買する機会がなく、実際の価格や品目の需要等の情報をつかむことができていません。今回、実際に卸業者のところに足を運び、カユーム氏が「うち（ＡＫＢＧ）にはこんな品物（布団）がありますが、どうでしょうか？」というセリフを業者に仮営業（調査の一環）しました。その様子は現在、準備を進めている「ＡＫＢＧ新規事業」の将来の姿を想像させました。ＡＫＢＧが自分の倉庫（拠点）を持ち、手元に到着した荷物を直接、業者に向けて卸売り販売していきます。業者との間には利害関係が生まれ、より具体的な情報が入ってくるイメージです。自分たちで売る立場に立つことは、事業に対するやりがいやモチベーションにもつながる、と今回の経験からも感じました。連帯事業の拡大が学校の運営費をより多く生み出すことにつながります。その大きなステップになる「新規事業」の計画をすすめ、事業拡大につなげられる回収品目の調査について継続して実行していきたいと思います。

「OSAKA」から来た「FUTON」のベール

日曜開かれているバザール（市）で中古のバッグを販売している店
中古の衣類や食器など様々なものが販売され、多くの人で賑わう

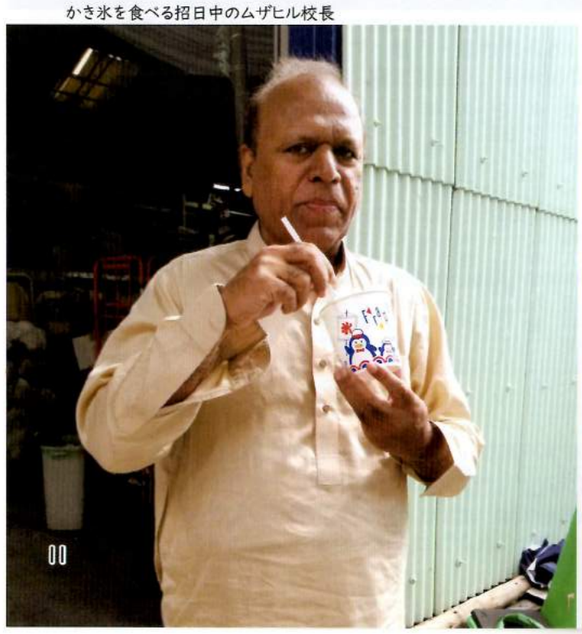
毎月恒例「軒先市」

毎月、第二土曜日に千葉センター前にて「軒先市」を開催しています（6月、12月はチャリティバザール開催のためなし）。昨年9月から始め、一年を迎えました。はじまりは、選別作業に協力する団体が集まって、近況を報告する「寄り合い」での千葉ダルク（薬物依存から仲間同士で支え合い回復を目指している施設）からの話しでした。「今、回復プログラムとして農業を行なっている。将来的に就労継続支援B型の作業として事業化して、そこがなかなか働く場所が見つからない仲間の回復のステップになっていければ」。話を聞いて、その目的に共感するとともに、普段から選別作業等への協力を通して、顔の見えるみなさんがやろうとしている計画に協力したいと思いました。選別協力団体には、生活保護を受ける方たちの支援プログラムとして農業をやっているオアシスや、手作り雑貨を制作しているあみあみ（生活クラブ虹の街のサークル）もいます。みなで作っているものを持ち寄り、販売の場をつくろう、ということになりました。〝市〟としてお客さんに楽しんでもらえるように、チャリティバザールに参加している団体やお店で野菜や雑貨、食べ物を扱っているところにも声をかけ、月一回の軒先市を開催することになりました。

来所してくれるお客さんはまだ少ないのが現状ですが、常連さんとして来て下さる方も出てきました。千葉ダルクは当初は野菜のみ販売していましたが、2019年4月からは、メンバーの経験を活かして焼きそばや季節に合わせてかき氷も販売しています。その賑やかな様子を見て、公園で遊んでいた子どもたちが集まってきていました（ちゃっかりダルクのお兄さんにかき氷をおごってもらっていました）。自分たちで作った野菜を「売る」ことで、お客さんにもっと喜んでもらえる野菜を作ろうという気持ちが芽生えたと担当のCさんは言っていました。販売を通して、地域の人との交流が生まれ、やりがいにも繋がっているようです。

この軒先市がJFSAにとっても、ご近所の方が足を運ぶ機会となり、店でお買い物をしたり、古着回収に協力してくれるきっかけになることを目指しています。事業的に成り立つことで、「やりたい」という思いを実現できます。この先も継続していけるよう、皆で知恵を出し合い、より多くの人に来てもらえるようにしていきたいです。

千葉センター担当事務局　入江賢治


かき氷を食べる招日中のムザヒル校長

かき氷を作るダルクのスタッフ（手前）とJFSA事務局の入江（奥）

パルシステム千葉での交流会 理事の皆さんと

常総生協の専務理事（左）と談笑するムザヒル校長（右）

交流会

「なぜパキスタンの学校を支援しているのですか？」という質問をいただくことがあります。そんな時は「1990年前後、当時日本へ出稼ぎに来ていたパキスタン人たちとJFSA立ち上げメンバーが出会い、彼らの交流からパキスタンへ繋がった」という経緯をご説明します。JFSA立ち上げから現在に至るまでお互いに行き来し、相談しあいながら活動してきました。「招日」は具体的な交流の柱の一つです。

7月10日から17日の8日間、アル・カイールアカデミー校長のムザヒル氏とAKBG事務局のカユーム氏を招日しました。そして、今年から新たに回収協力団体に加わった常総生協を含め、様々な団体を訪問し交流しました。またJFSA千葉センターでは久しぶりに会員・支援メンバーとの交流会を開くことができました。それぞれの交流会では現地の近況を写真や動画で紹介し、また参加者からは幾つも質問が寄せられ、ムザヒル校長が詳しく答えました。交流会の一部をご紹介します。

【質問】現在の卒業生の進路はどのようになっているのですか？

【ムザヒル校長】進路は様々です。アル・カイールアカデミーの運営するカレッジへ進学したり、更にその後大学へ進学する生徒もいます。大学の学費を工面するのが厳しい家庭には、学校として支援をしています。仕事としては、最近では銀行や会社などを含めいろいろな仕事に進む生徒がいます。一方で、私たちは生徒に学ぶことの目的は良い仕事を得ること自体ではないと伝えています。どんな職場で働くとしても、学校で学んだことによって、彼らは仕事の意味を理解し働くことができます。そのため仕事の習熟も早く、また仕事へ打ち込むこともできるでしょう。生徒たち自身が社会のことや世界のことを理解し、より良い人生について自ら考える力を身につけることが何より大切だと考えています。

【質問】生徒が学び続けるためには親の理解も必要だと聞いています。学校としてはどのようにして生徒が学び続けられる環境を作っているのでしょうか？

【ムザヒル校長】男子生徒は、高学年になるにつれて「自分も親と同じように日雇いの仕事をするのだろう、これ以上学ぶ必要は無いのでは・・」という気持ちになりがちです。家庭の事情や、生徒自身のモチベーションが下がることが理由で学校を中退する生徒もいます。中流家庭の子どもであれば、生徒のモチベーションを保つことは比較的容易です。スラムの子どもたちにとってはモチベーションの持続が大変な問題なのです。私たちは子どもたちとの関わりの中で彼らの暮らしをきちんと理解する必要がありますし、教師が親を説得することもあります。177名いる先生の中で約40名がアル・カイールアカデミーの卒業生の女性です。彼ら自身もスラム地域の住人ですから、子ども達のことを一番理解しているともいえます。また地域によっては家庭を訪問してもお母さんと話せるのは女性のみというケースが多々あります。今後は益々女性の先生に活躍してほしいと考えています。最終的には学校という場所が生徒一人一人の将来を照らすことのできる、美しい環境となることが目標です。

一人前

２０１９年度（２０１９年10月から２０２０年９月）、２０１０年11月オープンの東葛センターは丸９年を過ぎて10年目を迎えます。先達の言葉をお借りすると、古着屋は10年たったら一人前だそうです。自分たちは日本とパキスタンの事業を連帯させて、活動を続けていくことが主な目的の一つです。双方が自立、つまり一人前になっていないと支え合ってはいけません。もちろん相手にもそれを求めていきますが、まずは自分たちがどうなのかを常に考えていかないといけないと思っています。

丸10年となるまでは１年以上あるので、それまでに自分が思う一人前を目指そうと思っていますが、そもそも一人前とは何でしょうか。法的な「大人」、現在は20歳ですが２０２２年４月から18歳に変わりますね。20歳からというのは明治時代以降だそうで、それ以前は違う区切りがあったようです。江戸時代では身分や職業によって異なったようですが、自分たちは古着事業を営んでいるという点では商家となり、丁稚の年季奉公を終えるのが10年で、その後、手代に昇格すると一人前になったそうです。手代では雑用ではなく主要な仕事をするようになるとともに給与も得られるようになり、結婚、飲酒、喫煙などが許されたそうです。だいたい10歳ぐらいから丁稚入りしたと考えると、20歳ぐらいということになり、現在と同じくらいだと言えるかと思います。地域によって差異があったようですが、概ねこんな感じだったそうです。

ただ自分たちは江戸時代の商家と違って主人がいるわけではないので、自分たちで判断しないといけないと思っています。２０１０年、事務局１人、アルバイトスタッフ２人でスタートした東葛センターは、２０１９年度を迎える時点で事務局３人、アルバイトスタッフ６人となり、頭数ではちょうど３倍になりました。輸入古着事業は大きく伸び、縫製工房と連動した「kar-khana（カルハナ）事業」もスタートしました。しかし、古着回収量が目標に届いていないことや、作業環境も整っているとは言い難い状況です。アル・カイール事業部も同様に、満足な価格で古着の販売がされておらず、学校の運営費における販売収益の割合も下がってきています。新規事業への取り組みもなかなか進んでいません。一歩引くと見えるそうした状況の中で、目的に向けてお互い協力して連帯事業を推し進め、２０２０年11月、東葛センターが丸10年を迎えるころには、お互い一人前だと胸を張って言えるように取り組んでいきたいと思っています。

東葛センター担当事務局　田辺　航太郎

パキスタンから輸入した大量の古着を2階へ上げるアルバイトスタッフ

お店の前にあるアルバイトスタッフが作成した看板

心根（こころね）フリマ通信

「つながりひろがれ『ぽっぽの市』」の広がり

11月17日（日）〝秋の〟つながりひろがれ「ぽっぽの市」を開催します♪

ＪＦＳＡは活動をアピールすること、衣類等の回収や販売の場を作ることを目的に「ぽっぽの市」実行委員会に参加しています。前回４月は「ちいき新聞」という地元のコミュニティ紙の取材を受け、一面に記事掲載されたこともあり、写真の通り大勢の皆さんが来場しました。

街商担当事務局　依知川　守

イベント全体としては物販や食べ物、手作り品などが約70軒、家庭の不用品を持ち寄るフリーマーケットが約40軒出店。ステージには地元のバトントワリングやフラダンスのキッズ達、和太鼓チームや千葉ダルクのエイサー太鼓の演舞、千葉大学モダンジャズ研究会などバンドも参加してとても賑やかです。

そして第14回が２０１９年11月17日（日）に決まり、実行委員会は新たに「リユース食器」の導入にチャレンジしようとしています。「リユース食器」を提供するのはワーカーズコレクティブ（※）「風車」です。「風車」はゴミ減量化としての「リユース食器」の取り組みを、引きこもり当事者やハンディのある人たちも含めた様々な人達の居場所＝働く場作りとして実践しています。「ゴミをなるべく出さないイベントにしたいよね」というのはこれまでも実行委員会の合言葉でしたが、「風車」と出会い、その活動へ共感し、リユース食器の導入を決断しました。出店者、来場者の皆さんとも協力して、「リユース食器」の利用を一歩前進させたいと思います。

ＪＦＳＡは、前回（４月）の開催で衣類やバッグなどを約７００ＫＧ回収することができました。今後も「ぽっぽの市」を通して、ＪＦＳＡの回収と販売活動がより推進されますよう、皆様イベントの告知にぜひご協力ください。

また会場までお越しいただける方は、お気軽にＪＦＳＡの回収・販売ブースにご参加いただけたら嬉しいです！お問合せはお気軽にＪＦＳＡ事務局へどうぞ。

※ワーカーズコレクティブ：雇う・雇われるという関係ではなく、全員が出資し、経営を担う、主体的な働き方の事業体です。

ぽっぽの市ホームページ
https://popponoichi.jimdo.com/

Facebookページ
https://www.facebook.com/popponoichi

イベント回収について

ＪＦＳＡは「ぽっぽの市」だけではなく、幕張ベイタウン（美浜区）の朝市や夏祭り、アースデイちば（稲毛海浜公園）など、様々なイベントで衣類などの回収を行なっています。
スケジュールや回収の詳細は、http://jfsa.jpn.org/eventkaishu（ＪＦＳＡホームページ内）でご案内しています。
ぜひお知り合いの方にも情報シェアにご協力ください

لے جانا
レー・ジャーナー

「運ぶ」

物や人をある場所から他の場所へ移す
移動させる
ある場所まで出向く、目的地に行く

シンド州ダドゥの農村　少女たちが運んでいるのは牛のフン　乾燥させて畑の肥料や燃料にするそうだ

上：港の近くの倉庫街「シャーシャコロニー」
仕入れた大量の古着をカラチ市内に運ぶ卸売業者

左：カラチのチャイハネ（チャイ屋）
ミントティーを運んできた少年　彼はこの店で働いている

上：アル・カイールアカデミー本校のあるスラムエリア
回収した廃品を乗せた荷車を押している男性

右：カラチ市内　朝のラッシュ
バスの上に乗って目的地に向かう男性たち
昇り降りがしやすいよう、ハシゴが付いている

右上：カラチ市内
チャイに欠かせない牛乳を運ぶトラック
現在カラチ市の人口は 2000 万人を超えると言われている

左上：カラチ市内
ゴミの中の有価物（ビニールゴミやチャパティと呼ばれる
全粒粉の薄いパンの食べ残しなど）を運んでいる

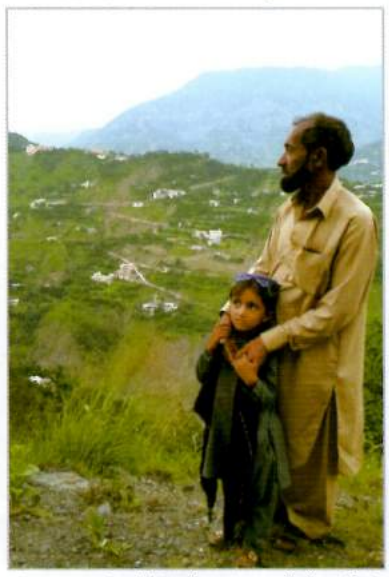
右　：アル・カイールアカデミー本校前
5 人の子どもを迎えに来た父親

バクリー

牝山羊

2019年8月末、AKBG事務局カユーム氏の故郷の村を訪れました。2005年のパキスタン北部地震の際に始めた青空学校や、周辺の村の様子を見てきました。連なる山々の中腹で、畑で作物を作り、家畜を飼って人々は暮らしています。食材や雑貨など必要なものは、車で30分程下ったふもとの町バラコートの商店で買います。ガスがある家もありますが、カユームさんの家では薪を燃やして食事やチャイを作っていました。

青空学校に通っている子どもの家を訪問したときの話です。家族や親戚、近所の方などたくさんの女性たちが集まってきて、子どもはいるのか、何人家族か、どんな家に住んでいるのか、パキスタンに来てどう感じているか・・・など、質問を投げかけられました。そんな中、「あなたの家では山羊を飼っていますか?」と聞かれました。



カユーム氏の故郷 奥の山々に集落が見える

質問の意図が分からずにいると、「ミルクはどうしているの?」と聞かれ、ハッとしました。ここでは家庭で山羊や牛を飼っていて、ミルクは搾りたて、ヨーグルトは自家製です。

牛乳は買ってくるものである私にとって、山で暮らす彼女たちの暮らしが、より鮮明に感じられた瞬間でした。カユームさんの家に泊まり、この地での暮らしを体感しましたが、私には想像できないことや、気づけないことがたくさんあることと思います。

彼女たちとのおしゃべりは、考えても気づけないことを一気に飛び越え、甘いチャイの味とともに、私の気持ちの中にじんわりとしみ込みました。

●チャエケサートの意味は・・・

パキスタンの公用語、ウルドゥー語で〝チャエ〟は「温かいミルクティー（チャイ）」、〝ケ サート〟は「一緒に」で〝チャイと一緒に〟という意味になります。パキスタンではチャイを飲みながら、賑やかにおしゃべりを楽しみます。

ボランティアのご案内

●船橋駅北口デッキ大古着市
日時：11月9日（土）8時半～16時頃
　　11月10日（日）10時～18時
場所：JR船橋駅北口デッキ
・準備、片付け、販売のお手伝い
　※ご都合が合う時間だけでも構いません

★その他のボランティア
●コンテナ送り出し作業（年4回）
●イベント・フリーマーケットなどでの協力（週末）
●切手やハガキの整理
●会報など発送作業（年4回）
●古着の選別体験（グループ対応）
●和服整理ボランティア
（毎月第1火曜10時半～）

お問い合わせはJFSAまで

会員・支援メンバーを募集しています

JFSAは正会員及び賛助会員（支援メンバー）で構成されています。
皆さんの参加が、パキスタンの人々との連帯事業を推し進める力になります。

2018年度 正会員 個人：143名、団体：12
賛助会員 個人：1100名、団体：5

会員・支援メンバーの方には、会報・回収案内（年3回）、サポーターグッズ（年1回）をお送りします。

●年会費（10月～翌年9月）
個人：会員5,000円 / 支援メンバー2,000円
団体：会員50,000円 / 支援メンバー10,000円

●会費振込み口座（郵便振替）
番号：00160-7-444198
口座名：JFSA
＊活動への寄付にも同じ口座がご利用できます。
通信欄に「寄付」とお書き添え下さい

NPO法人 日本ファイバーリサイクル連帯協議会（JFSA）（9時～19時半／木曜定休）

千葉センター　千葉市中央区都町3-14-10
Tel：043-234-1206

東葛センター　柏市大室176-1
Tel：04-7110-0984

★ 会報についての感想やご意見もお気軽にお寄せください。
電話・fax：043-234-1206　メール：jfsa@f3.dion.ne.jp　ホームページ：http://jfsa.jpn.org

JFSAのホームページ